小学校外国語活動におけるALTの活用の在り方に関する基礎的研究 ―ALTに対する予備的調査を通して―

大谷みどり*・築道　和明**

Midori OTANI and Kazuaki TSUIDO

A Pilot Study on Utilization of Assistant Language Teachers in Foreign Language Activities at Elementary Schools—Based on a Preliminary Questionnaire Survey to ALTs—

ABSTRACT

平成23年度から導入される小学校外国語活動に関しては，学習指導要領の趣旨やこれまでの研究開発学校の成果を踏まえた『英語ノート』の出版，学校への配布，教員研修用のガイドブックやDVD等の制作，というように小学校教員に対する国の支援策が進められている。一方で，小学校外国語活動ではALTの積極的な活用も求められている。筆者らは，日本人教員，ALT，教育行政担当者等，小学校外国語活動に関与する側の意識やニーズを十分に踏まえた教員研修を構築することがとりわけ重要であると考える。そのための第一歩として，本研究ではALTの声を探る予備的な調査を実施した。具体的には，人口20万規模のA市に勤務するALT10名に対するアンケート調査を行い，（１）先行研究で明らかにされている問題との比較，（２）小学校と中学校という学校種による問題の比較，という二点を中心に考察を加えた。その結果，コミュニケーション不足や自己有用感の欠如，生徒指導上の問題等，これまでの研究で指摘されていることが今回の調査でもALTから指摘された。「テープレコーダー代わり」という問題は，現在でも解消されていないのである。また，小学校と中学校の間でALTがとらえる問題には，共通面もあるものの，小学校の外国語活動が新規の試みであること，そのため小学校教員自身が不慣れであること，中学校の英語科教科書と『英語ノート』との性格の違いがあること等から，若干異なる指摘もみられた。

【キーワード：小学校外国語活動，ALT，ティームティーチング，コミュニケーション】

１．はじめに

1987年に導入された The Japan Exchange and Teaching Programme（語学指導等を行う外国青年招致事業，以下JETプログラム）は，その目的として（１）我が国の地域レベルの国際化と（２）外国語教育の改善･充実，といった二点を目指していた。しかし，JETプログラムに参加する外国語指導助手（assistant language teachers, 以下ALT）の日本に対する適応に関わる問題や日本人教員（Japanese teachers of English，以下JTE）との相互理解に関わる研究は，McConnell（2000），浅井（2006）等きわめて少ないのが現状である。そのような限られた研究の中で，Tsuido (1997)，Otani & Van Loh (1998), 築道（2000），Otani (2004)，築道（2006[a]），築道（2006[b]），大谷（2007）では，ALTの日本の学校現場に対する認識の実態やJTEとの相互理解の実際を中心に意識調査を行ってきた。これら一連の研究から，最も重要な問題として「ALTの役割の曖昧さ」,「ALTの不十分な活用」,「JTEの多忙さ」等が明らかになった。これらの問題は，ALT側の自己有用感の喪失や職場での孤立感という異文化理解上の問題へとつながり，例えば任期途中での帰国等の具体的な問題へと発展したケースの遠因とも考えられる。

このような現状の中で，平成23年度から小学校の教育課程に「外国語活動」が導入されることとなり，そのための移行措置が実施に移されている。また，外国語活動の具体的な実施に当たっては，ネイティブ・スピーカーの積極的な活用が求められている（文部科学省2008）[1)]。小学校への英語活動導入は，昭和61年の中央教育審議会の答申における英語教育開始時期の検討への提言に端を発し，平成10年改定の学習指導要領により，「総合的な学習の時間」が設けられ，「国際理解に関する学習の一環として」英語活動が実践されるようになった。それ以来，その実施時間数も増加している。文部科学省（2009）によると，５・６年生における平成21年度年間計画実施時間数の全国平均は，それぞれ28.3時間となっており，平成22年度の予定実施時間数は32.2時間となっている。また，外国語活動におけるALTの活用率は，JETプログラム以外のALT（いわゆるNon-JET）を含めると，小学校では67.4％となっており，中学校の24.9％よりもはるかに高い[2)]。さらに公立小学校の教員3,292名を対象にした別の調査では、ALTに対する評価も概ね肯定的であり，「ALTは十分な指導力がある」という問いに対しては86.3％，「ALTによる英語教育はうまくいっている」という質問に対しては，肯定的な回答が83.3％を占めている（Benesse教育研究開発センター，2007）。

*　島根大学教育学部言語文化教育講座
**広島大学外国語教育研究センター

このように小学校の外国語活動の成否を左右すると思われるALTの活用であるが，小学校の外国語活動にALTを活用する場合に，何ら準備せず，ALTが教室に居れば異文化理解につながるというような安易な発想だけは避けるべきであろう。中等学校の外国語教育においても20年以上の歴史を有するALTとのティームティーチングの導入段階では，「黒船の襲来」に例えられるほど大きな混乱が生じたことを考えると，小学校ではALTの異文化適応上の問題は言うまでもなく，ティームティーチングに関しても中等学校現場に導入された時よりもさらに多くの問題や混乱が予想される。なぜならば，中等学校での外国語科とは異なり，小学校の外国語活動は担当教員の外国語運用能力をはじめ，カリキュラムや教材，指導方法，評価方法等，その全体にわたって未知数の部分が多いからである。とりわけ重要な問題として小学校教員に対する研修という課題がある。つまり，当事者である小学校教員も今後外国語活動について研修を受けていかなければならないからである。もちろん，文部科学省による小学校教員（中核教員）対象の研修や研修用のハンドブックの作成，DVDの配布等の支援はあるが，小学校教員の側から言えば，「小学校外国語活動」という新たな課題に取り組みながら，同時に「ALTとのティームティーチング」という別の新たな課題に直面しなければならないのである。

とりわけ，上で指摘したように，これまでの中等学校でのティームティーチングでしばしば指摘されてきたALTの役割の曖昧さ，それによる仕事のなさ等，ALTの不満につながる要因について十分に検討を加え，小学校の外国語活動においてALTをどのように活用するかを早急に考える必要がある。その場合，ALT側の意識や考えはもちろんであるが，外国語そのものに不安を感じている多くの小学校教員のニーズにも十分に配慮した活用方策を構想する必要がある。

そこで，筆者らは，小学校教員の外国語活動に関する研修という点に焦点を置いて，その研修の中にALTをどのように活用していくかというテーマの研究に2009年度から着手した。この研究課題を進めるには，当事者である小学校教員，ALT，さらには指導主事を中心とした教育行政担当者，中学校及び高等学校英語科教員に対する意識調査等を実施する必要があるが，本稿は，ALTがどのような異文化理解上の課題に直面しているかを把握することを目的とする。つまり，先行調査で明らかになった主要な課題との比較という視座を縦糸に，また，中学校（高等学校）の英語科授業を担当する場合と小学校の外国語活動を担当する場合との比較という観点を横糸に置き，A市に勤務するALTに対する予備的な調査を実施し，その結果の概要を報告するものである。

2　先行研究

財団法人自治体国際化協会（2008）は，2007年10月に60名のALTと158名のJTEを対象に，ティームティーチングにおける相互関係についてのアンケート調査を実施している。ティームティーチングを成功させるために最も重要な点としては，ALT，JTEとも “cooperation / mutual understanding” という点を指摘しており，また，そのためには授業について議論する時間を取ることの重要性を認識している。一方で，ALTに共通する不満として，“lack of feedback” が指摘されている。関連して，空き時間が多すぎること，十分な活用がなされていないこと等がALTの直面している主要な問題であることが明らかにされている。

次に，大谷（2007）では，留学生や外国人児童・生徒等と比べて，「成人」として来日し，JTEと共に仕事をするというALTという立場の特殊性を指摘した上で，ティームティーチングの授業に限定せず，より広い観点からALTやJTEが直面している異文化理解・異文化コミュニケーションの問題を考察した。Otani & Van Loh (1998), Otani (2005)で実施した1998年から2007年までの国内でのアンケート調査や面接調査等，2000年から2004年までの米国でのデータを分析の対象したが，主だった結果として，ALTとJTEとの異文化理解・異文化コミュニケーション上のギャップには，以下のようなマクロ的な要因とミクロ的要因が影響していることが明らかになった。

○ALTとJTEとの異文化理解・異文化コミュニケーションギャップに影響し得るマクロ的な要因

（1）日本の学校に関する要因
- ・教育制度・方針の相違
- ・学校組織の在り方
- ・学校・教師の役割と日本人教員の多忙さ
- ・教授法・指導方法
- ・生徒指導の方針を含めた生徒への対応
- ・日本の学校特有の行事
- ・学校・教室内での異なった習慣

（2）日本人教員とALTを取り巻く他の要因
- ・各自治体の特性
- ・ALTの学校訪問（勤務）形態
- ・学校の規模や特性
- ・JETプログラムの特性

○ALTとJTEとの異文化理解・異文化コミュニケーションギャップに影響し得るミクロ的要因

（1）各ALTの持つ要因：異なった文化や状況への適応性，来日動機，日本社会や文化・教育に関する知識や関心度，就労経験，海外在住経験，日本語能力等

（2）各JTEの持つ要因：英語教育・ティームティーチングに対する考え方，英語運用能力もしくは積極性，ALTへの対応の仕方

（3）両者のかかわり方：コミュニケーションの取り方，人間関係

特に（3）のALTとJTE間に存在し得るコミュニケーションの取り方の相違が，上記の様々な要因に基づく誤解や理解不足を引き起こしていると指摘している。言葉でのコミュニケーションを重んじるALTに対して，「察する」「空気を読む」などに代表される言外の意味を汲み取ろうとする日本的なコミュニケーションは，初めて日本・日本の教育現場を経験するALTにとっては，ますます混乱をきたすこととなり，ひいては充実したティームティーチングの実施を困難にする。

学校というある種特別な職場環境におけるALTとJTEとの相互理解に焦点を当てたTsuido (1997), 築道（2000），築道（2006[b]）の研究では，ALTが学校現場で感じる葛藤や課題として以下の4点が明らかになった。

（1）ティームティーチングの授業に関する問題
・授業そのものの回数が少ない
・授業のゴールが明確でない
・授業の評価がなされない
（2）生徒に関する問題
・授業に対して消極的である（動機づけに欠ける）
・問題行動を起こして授業を混乱させる
・成績が悪くても卒業できる
（3）JTEの姿勢や英語力に関する問題
・授業をALTに任せっぱなしにし，JTEから何ら指導がなされない
・JTEの側にティームティーチングに対する意欲がない，方法論がない
・日本語しか使わない
・英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとしない
（4）教室外での日本人教員とのコミュニケーションに関する問題
・学校行事等に参加することを当然視されて事前の連絡がない
・誰も話しかけないので一人で職員室にいる
・そもそも何をすべきか，どうすべきかがわからない

もちろん，これら4つの問題は，個々別々に存在しているというよりも，相互に影響し合って，結果として，学校におけるALTの孤立感（自己有用感の欠如）という根本的な問題につながっていると言える。

3．調査目的

本調査では，前節で述べたティームティーチングの諸課題が，現状ではどのように変化しているのか，あるいは変化していないのかをALTに対するアンケート調査により明らかにする（過去と現在との比較）。次に，平成23年度からの小学校外国語活動の導入という新たな課題に関連して，ALTの活用が国から推奨されているが，中学校・高等学校と小学校という異なった職場環境とALTがとらえるティームティーチングの課題との関係性について考察する（学校種間の比較）。これらにより，今後求められる小学校外国語活動を中心的に担当する学級担任に対する研修をどう構築するかについての何らかの示唆を得たい。

4．調査方法

調査対象地域として，人口約20万規模のA市を選んだ[3)]。A市に勤務するALT10名に対して，2009年5月中旬に，以下のような主な質問を含むアンケート調査を実施した。なお，アンケート調査の詳細については，appendixに掲載した。

1）各ALTの背景：出身国，来日前の大学での専攻，就労経験，JETプログラム応募動機
2）ALTとしての勤務状況：ALTとしての年数，勤務校種，授業時数
3）ALTとしての仕事に関する意見・感想：満足している点，困難に感ずる点，改善を希望する点

A市の教育委員会では，毎週一回ALTのミーティングが実施されているが，教育委員会の許可を得てミーティング終了後に筆者の一人がアンケート用紙を配布し，回答を求めた。8名がその場で記入し，残りの2名は，後日ファックスにより回答した[4)]。その場で回答した8名のALTについては，回答に要した時間には個人差があるが，かなりの時間をかけたALTもいる。

アンケート調査の分析については，今回は主だった質問項目（ALTとして満足している点，困難と感じている点）に対する記述内容をKJ法により考察し，「生徒・児童」「教員」「授業」の3つの項目に分類し，考察を加える。なお，以下の調査結果の記述においては，ALTの回答を翻訳して記載する。

5．調査結果と考察

まず，回答した10名のALTの背景情報についてまとめる。勤務年数1年目，2年目のALTがそれぞれ2名，残りの6名は3年目であった。勤務年数1年目というのは，調査時期が5月であるので，前年9月に遡ると9ケ月ALTとして働いていることを意味する。勤務する学校種については，6名が中学校と小学校，2名が中学校のみ，高校と中学校に勤務するALTが1名，高校のみが1名という結果であった。次に，アンケート調査の中から主だった質問項目に対する回答の概要を記す。

最初にALTとして勤務する上での満足感や充実感についての回答結果を表1に掲載した。

ALTの仕事に対する満足感に関しては，中学校・小学校とも「生徒」や「児童」に関する記述が顕著である。しかし，その具体的な記述内容を読むと，中学校の場合は「生徒と関わっている時間」を楽しんでいるとするコ

表１　アンケート調査に記述されたALTとしての満足感の主要な項目（複数回答）

	中学校	小学校
生徒・児童	・生徒たちは楽しい，生徒との時間が楽しい　8 名 ・生徒の英語の学習・上達を実感できる　2 名 ・学校行事で，生徒を支援できる 1 名 ・自分の文化を紹介できる　1 名	・英語に対する子どもたちの積極性 4 名 ・子どもたちと過ごす時間が楽しい 2 名 ・子どもたちの元気さと積極性　2 名
教　員	・生徒も含めて，新たな友人となれる　　1 名 ・教員との人間関係は，時に変わることもあるが，概ね良好である　1 名	・英語の壁はあるが，英語を学ぶことに前向き，自分を信頼してくれている　1 名
授　業	・教えることに参加でき，役に立ったと実感できる時 2 名 ・授業がうまくいった時　1 名 ・生徒用にパソコンで余分の教材を作れること　1 名	・自分で授業が創れる，授業に対する責任を感じる　1 名 ・実際的な（本物の）英語を含む教案を作ることができる　1 名

表２　アンケート調査に記述されたALTとしての困難点の主要な項目（複数回答）

	中学校	小学校
生徒・児童	・生徒指導上の問題（授業中の居眠り，私語，授業妨害，無礼など）3 名 ・スピーキング・テストがないため，生徒が積極的に話さない　1 名 ・英語が嫌いな生徒に対する対応の仕方　1 名	・時に規律がない（例：騒がしい）1 名 ・時々，英語を教科ではなく、遊びの時間とみている。1 名 ・もっと英語で話してほしい　1 名
教　員	・ALT の活用不足 3 名 ・打ち合わせ時間の不足　3 名 ・ALT を無視（軽視）2 名 ・コミュニケーション不足　2 名 ・授業・授業以外の学校行事などに関する情報不足 1 名 ・ALT の活用法に対する研修不足　1 名 ・ALT に対する関心不足，生徒への影響　1 名 ・不徹底な生徒指導　1 名	・担任の消極的態度 3 名 ・教案作成，授業時間中の協力不足 1 名 ・時間割変更や学校行事に関する伝達不足　1 名 ・カタカナ英語の子どもたちへの影響　　1 名 ・子どもたちへの厳しい管理　1 名
授　業	・教科書に対する批判，疑問　3 名 ・話す時間・コミュニケーション活動の不足　3 名 ・教科書中心（生徒の学習意欲減退）　2 名 ・テープレコーダー代わり　2 名 ・書く事・暗記中心（ALT の存在意味がない）1 名 ・文法を知らないので，日本語ができなければ教えるのが難しい　1 名 ・文法中心　1 名 ・教科書以外の副教材等作成の工夫不足　1 名	・カリキュラム・年間計画・指針の欠如　2 名 ・フォニックスの必要性　2 名 ・アルファベット（ABC）の必要性　1 名 ・内容不足（子どもたちの学習不足）1 名 ・1～4 年と対照的に，5，6 年は英語ノートに執着 1 名 ・子どもの能力を過小評価　1 名 ・活動種類を増加・多様化の必要性　1 名

メントが多く，小学校では「児童の英語学習に対する積極性」に言及するコメントが多いという違いがみられた。これは，おそらく小学生の方がその成長段階からして英語や英語活動，ALTに対する関わり等の点において柔軟に取り組む姿勢が表われたことを示しているのだろう。この他，中学校に見られなかった満足感についてのコメントとしては，小学校の方がALTに任される部分が多い（自分で授業を創る）とするものがあった。この記述も以下にみるように，裏返せば「ALTに丸投げする」ということにつながる危険性もあり，ALTによっては，感じ方，受け止め方に個人差が生じると予想される。

次に，ALTが感じている困難点を表２にまとめた。

ALTが感じている困難点や問題点としては，中学校で

は，教科書の内容，教科書や文法・書くこと，暗記中心の授業への疑問，スピーキングやコミュニケーション活動の不足，テープレコーダー代わりのALTの利用などが挙げられた。教員に関しては，打ち合わせ時間の不足や時間割・学校行事の伝達不足（欠如）を含めると「コミュニケーションの不足」が最も多く，続いてALTの活用不足が指摘された。またALTが無視されている，もしくはALTを軽視している姿勢が生徒に影響している，とする指摘もみられた。生徒に関しては，私語や授業中の居眠りを含め，生徒指導上の問題が最も多かった。これは，生徒指導に関するALTの出身国と日本との相違が大きく影響した結果と考えられる。例えばアメリカの初等・中等学校では，「学校は（教科を）勉強･学習する場であり，授業の邪魔になる生徒は教室外に出されて別に指導を受ける」という考え方が強く，日本では教室で騒いでいる生徒を黙認していることが多いのを生徒指導が機能していないと批判的にみるALTは多い。

一方，小学校に関しては，外国語活動が始まったばかりということもあり，授業内容自体に関するコメントが多い。授業内容に関する記述では，「フォニックスの必要性」や「アルファベット学習の充実」，あるいは「内容がやさしく，子どもの能力を過小評価しているのではないか」等のコメントがみられた。これらの指摘は，小学校の外国語活動に関して「スキルを教えることではない」とする文部科学省の指針と対立する内容とも考えられ，小学校外国語活動の目的も含め，その趣旨や具体的な活動についてALTとどのように相互理解を図るかが問われていると言える。教員に関する課題としては，授業への担任の積極的な参加の必要性が強く指摘されている。具体的には，「教室の後ろに立っている，授業にかかわらない，黙って教室を出ていく」，「英語を話す事・教えることへの教員の消極性が子どもたちに悪影響を与える」等のコメントがみられた。

今回のアンケート調査では，働く環境をどうすれば改善しうるかという質問もしている。この質問に対しての回答は，中学校，小学校を問わず「教員」（teachers）がキーワードとして頻出している。具体的には，「コミュニケーションをしっかり図ること」「生徒指導を充実すること」「ALTを十分に活用すること」「授業に対して責任やリーダーシップを取ること」「授業や英語，コミュニケーションに対する積極性が学習者の学びに反映すること」等の記述があった。

6．結論と今後の課題

今回の予備的な調査では，ALTに関する先行研究で明らかにされているいくつかの主要な問題について，現状ではどのような実態になっているかをA市という限定された地域ではあるが，探ってみた。その結果としては，自己有用感がないこと（十分な仕事がないこと），様々な場面でのコミュニケーション不足，直前になっての指示や説明，生徒指導上の問題等，大きな変化はみられないことが明らかになった。教育行政の側からは，ALTに対するオリエンテーションの充実や研修内容の見直し等が行われ（例えば『教育教材資料ハンドブック』の作成），日本人教員側から言えば，多くの指導事例集や授業実践が公にされてきている。こうした良い意味での変化が英語教育の中に存在しているにも関わらず，日本人教員のティームティーチングやコミュニケーションそのものに対する姿勢が課題としてALTから指摘されるのは，なぜなのか。日本人教員の多忙さや小学校教員の場合には初めての経験である等の理由がそこには働いていると思われるが，今後特に小学校教員を中心にしてアンケート調査等の量的な方法に加えて，面接調査，小学校外国語活動への参与観察等も取り入れながら，研究を進めていく必要がある

学校種によるALTの抱える問題の差異については，生徒・児童に関わって「生徒指導」についての記述では共通していた。ただ，「生徒指導」（discipline）という言葉の意味する内容について小学校と中学校では若干の相違がある可能性も否定できない。中学校の場合，授業を妨害する，マンガを読む，携帯を触る，授業そのものに対する無関心等といった具体的な問題行動を意味しているのに対して，小学校の児童の場合，「騒がしい」とALTに映る問題行動も日本人の教員からすれば，「元気さ」（積極性）ということの裏返しであるかも知れない。

授業そのものについては，中学校に関しては教科書に対する批判がみられる。一方，小学校の外国語活動に関しては、指導内容やそのレベルについての疑問がみられた。これは『英語ノート』そのものが教科書ではないこと，授業で使用し始めて間もないこと等が影響したためと思われる。今後，小学校外国語活動が充実し，『英語ノート』そのものの活用も進んでいけば．ALTから『英語ノート』に対する批判的なコメントも生まれてくるかもしれない。

最後に，教員については，小学校も中学校も大きな違いは見られない。ただ，前述したように仕事を行う上で求められている点としては，「教員」が鍵概念として多くのALTから指摘されている。教員研修として何が必要なのか，多忙を極める教員にとって真に意味のある研修をどう構築するか，今後の課題としたい。

付記　本研究は，科学研究費補助金基盤研究(C)（課題番号21520634）による研究成果の一部である。

注

1）具体的には，「（前略）授業の実施に当たっては，ネイティブ・スピーカーの活用に努めるとともに，地域の実態に応じて，外国語に堪能な地域の人々の協力を得るなど，指導体制を充実すること。」とされている。（文部科学省，2008，p.15）この点に関連してALTと担任との役割分担に関しては，国立教育政策研究所（2009）の調査が興味深い結果を報告している。調査対象の学校が少数であるという点はあるものの，その調査によれば，「英

語の授業が好きか」という質問に対して，授業の形態によって「主担当が学級担任でALTなし」と「主担当がALT」を比較すると，「好き」「どちらかといえば好き」と答えた児童は，前者の学級担任の授業では５．６年とも約80％であったが，ALTが主の授業では５年生が65％，６年生では38％という結果であった。この調査報告書では，「ALTが主担当の場合，児童に対する理解が不十分なまま英語活動が行われる可能性がある」と指摘している。この指摘に見られるように、ALTの存在は非常に重要であるが，より効果的な授業・活動を行うには，小学校の場合，やはり児童にあった効果的なティームティーチングの形態とは何かが求められていると言える。

２）小串（2008）によれば，文部科学省の英語教育実施状況調査において，中学校，高校ともALTの活用は30％にも及ばないことが指摘されている。

３）調査対象としてA市を選んだのはいくつかの理由がある。一つは筆者らが，これまでA市の教員研修等に関与してきており，人間的な関係，特に教育行政担当者との信頼関係があるためである。また，今後日本人教員を含め，面接調査や参与観察等を実施していく上で，特定の自治体と緊密な連携を図っていく上で，小学校英語活動に積極的に取り組んでいるA市は，最適なフィールドと判断したからである。

４）今回の調査でアンケートに回答したALTのうち，高等学校だけに勤務している者は１名のみであり，特定の高等学校の実態が反映される結果になる可能性があると思われるので，以下の分析や考察では中学校と小学校の二つの校種に限定して議論する。

参考文献

浅井亜紀子（2006）『異文化接触における文化的アイデンティティのゆらぎ』ミネルヴァ書房

浅井亜紀子（2008）「大学生のALTステレオタイプ低減過程に関する考察―グローバル教育の効果と課題―」『カリタス女子短期大学研究紀要』第42号，pp.33-47.

大谷みどり（2007）「外国人指導助手（ALT）と日本の学校文化－日本人教員とALT間における異文化的要因」『島根大学教育学部紀要』第41巻（人文・社会科学）pp.105-112.

大谷みどり（2008）「アメリカの小学校における「コミュニケーション」教育への一考察－教育人類学の視点から」平成16～19年度　科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号16530520）研究成果報告書『教室内コミュニケーションの比較研究－「自己表現できる日本人」を育てるために - 』pp.36-43

小串雅則（2008）「JETプログラムの「これまで」と「これから」」『英語教育』第57巻，第２号，pp.10-14.

国立教育政策研究所（2009）平成20年度国立教育政策研究所「小学校における英語教育の在り方に関する調査研究」研究会報告資料

自治体国際化協会（2008）『JETプログラムの20年とその将来展望』

自治体国際化協会（2008）『平成20年度教育教材資料ハンドブック』

築道和明（2000）「学校での異文化葛藤場面に対するALTの反応（２）」『中国地区英語教育学会研究紀要』No.30, pp.29-38.

築道和明（2006[a]）「英語科教員に求められる異文化理解に関わる資質・能力―Team Teachingにおける諸問題を基にして―」『日本教科教育学会誌』第29巻，第1号，pp.1-10.

築道和明（2006[b]）『JETプログラムにおけるAssistant Language TeachersとJapanese Teachers of Englishとの相互理解に関する研究』広島大学大学院教育学研究科学位請求論文，129頁

築道和明（2007）「日本の英語教育改革に関する一考察―JETプログラムを中心に―」『広島外国語教育研究』No.10，pp.1-16.

築道和明（2008）「JETプログラムの現在・過去・未来」『英語教育』第57巻，第２号，pp.28-30.

恒吉僚子（1992）『人間形成の日米比較　かくれたカリキュラム』中公新書

直塚玲子（1980）『欧米人が沈黙するとき』大修館書店

西田ひろ子（1989）『実例で見る　日米コミュニケーションギャップ』大修館書店

ベネッセ教育研究開発センター（2007）『第１回小学校英語に関する基本調査（教員調査）報告書』ベネッセコーポレーション

萬戸克憲（1992）『国際化と英語科教育』大修館書店

文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説　外国語活動編』東洋館出版

文部科学省（2009）平成21年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果について www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/__icsFiles/afieldfile/2009/08/10/1269841_3.pdf

山下隆久他（2004）「本邦中等教育に従事する外国人語学教師の精神保健調査―埼玉県における予備調査から」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第３号，pp.19-32.

山本志都（2003）「地方自治体職員の外国人職員との関係及びコミュニケーションとそれに関わる調整認知の探索的研究：JETプログラム「国際交流員」の職場への参入に伴って」『青森公立大学紀要』第８巻，第2号，pp.54-76.

和田　稔（1991）『国際交流の挟間で　英語教育と異文化理解』研究社出版

Benjamin, G.R. (1997) *Japanese Lessons: A Year in a Japanese School through the Eyes of an American Anthropologist and her Children*. New York: New York University Press.

Butler, Y. Goto (2005) “Comparative perspectives towards communicative activities among

elementary school teachers in South Korea, Japan and Taiwan," *Language Teaching Research*, 9, 4, pp.423-466.

DeCoker, G. (ed.) (2002) *National Standards and School Reform in Japan and the United States*. New York: Teachers College, Columbia University.

Finkelstein, B. et al. (1991) *Discovering Japanese Culture and Education*. Yarmouth: Intercultural Press..

JET Programme Management Department, CLAIR (2008) "Team Teacihng Relationships." Unpublished paper.

Kubota, R. (2002) "The impact of globalization on language teaching in Japan," Block, D. & D. Cameron (eds.) *Globalization and Language Teaching*. London: Routledge. pp.13-28

LeTendre, G. K. (1999) *Learning to be Adolescent: Growing up in U.S. and Japanese Middle Schools*. New Haven: Yale University Press.

Lewis, C. C. (1995) *Educating Hearts and Minds*. New York: Cambridge University Press.

McConnell, D. L. (2000) *Importing Diversity: Inside Japan's JET Program*. Berkeley: University of California Press.

Okano, K. & M. Tsuchiya (1999) *Education in Contemporary Japan*: *Inequality and Diversity*. Cambridge University Press.

Otani, M. & T. Van Loh (1998) "Analysis and Evaluation of the Problems with the Living and Working Conditions of Shimane: Assistant Language Teachers on the Japan Exchange and Teaching Programme in 1998,"『島根医科大学紀要』21号, pp.21-32.

Otani, M. (2005) *Intercultural Work Relationship between Japanese Teachers and Assistant Foreign Teachers*: The JET Program (UMI: Dissertation Service) Ph.D. dissertation submitted to the American University, USA.

Rohlen, T & G. LeTendre (1998) *Teaching and Learning in Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.

Tsuido, K. (1997) "An Analysis of Assistant Language Teachers' Perception of School-Related Cultural Problems," *Annual Review of English Language Education*, Vol. 8, pp.61-70.

Tsuneyoshi, R. (2001) *The Japanese Model of Schooling: Comparisons with the United States*. New York: Routledge.

Appendix
今回のアンケート調査に用いた調査用紙（スペースは割愛している）

QUESTIONNAIRE FOR ALTS

Please briefly tell me your background.

Your Country		Your major at the university	
Working experiences (if you have)			
Your reasons to join the JET Program			

As an ALT:

* How many years have you been on the JET program? (Please circle below)
This is my (1st, 2nd, 3rd, 4th, 5th, other) years

* During this time, how many kinds of schools and how often have you worked as an ALT?

Kinds of schools (HS, JHS, ES, other)	Frequency of your visit of that school (ex) 3 times a week/ 1 week a month	No. of classes you teach at that school	Frequency of your teaching of the same class at that school (ex) once a week/ twice a month

Overall Experiences

* What are you enjoying or satisfied with as an ALT at Japanese schools?
[in HS and/or JHS]

[in elementary schools]

* What kinds of concerns do you have and what types of difficulties have you experienced as an ALT
[in HS and/or JHS]
・Contents to teach
・JTLs and/or other teachers and school staffs
・Students
・Others

[in elementary schools]
・Contents to teach
・JTLs and/or other teachers and school staffs
・Students
・Others

* What is the biggest obstacle or problem with teaching in this environment?

* Do you have difficulties communicating with JTLs or HR teachers?

Yes, a lot　Yes　I don't know　Not so much　Not at all

Comments:

* How do you think your working conditions can be improved?
Please write your comments and suggestions, being as specific as possible.

* If you have any other comments or thoughts, please write freely.

* If I can contact with you in future, please write me how I can reach you.
(ex. E-mail address, phone number)

Thank you very much for your cooperation